追　悼

阿　部　軍　治

筑波大学現代語・現代文化学系故永田康昭助教授が、平成11年4月7日（水）午前9時50分自宅で急逝された。入学式の日の思いもかけないとつぜんの出来事で、死因は急性心機能不全ということであった。まだ若く、これまで身体が弱いということを聞いたことがなく、しかも大学では前日まで比較的元気なお姿を何人もの同僚たちが見かけていたので、その日の朝、先ず永田さんが入院したという第一報があり、それから間もない昼頃、ご逝去されたとの知らせがもたらされたが、とても信じられなかった。最初の知らせがご家族からのものでなかったせいもあって、事務の方でも半信半疑で、直接うかがって確認した方がよいのではというような状況だったのである。いろいろな死があり、たしかにこのような不意の信じられないような死も多数ある、つまり事故死のようなそれである。永田さんとご家族や同僚たちとの永久（とわ）の別れも病死というよりはそのような死として感じられたであろう。

永田助教授は、昭和27年1月16日奈良県に生まれた。高校卒業後、昭和45年4月京都大学文学部に入学され、49年3月に同文学科西洋古典語学文学専攻を卒業した。その年4月に同大学大学院文学研究科修士課程言語学（西洋古典語学文学）専攻に進学、53年2月に退学した。その後昭和55年4月筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科文学専攻に転学し、柳沼重剛教授の指導のもとに西洋古典学をおさめ、58年に修士号を取得し、60年に満期退学している。両大学の修士課程ではギリシャ語・ギリシャ文学も学んでいるが、主にラテン語・ラテン文学の研究に従事している。そして昭和60年4月に、筑波大学研究協力部文部技官（準研究員）として採用され、文芸・言語学系勤務となり、西洋古典の研究を継続した。その後昭和62年4月、東北歯科大学、現奥羽大学に講師として採用され、平成4年3月まで勤務している。そして平成4年4月に、筑波大学講師に任用され、現代語・現代文化学系に所属し、主に、日本語・日本文化学類で教鞭をとることになり、その後平成9年5月に、助教授に昇任したのである。

永田助教授は本学では英語の授業を多く担当しておられたが、本来の専攻は

西洋古典文学で、特にラテン語・ラテン文化、なかんずくラテン文学を専門としていた。したがって、論文や翻訳は主にこの方面のもので、たとえば、「『アエネイス』の＜眠りの門＞と物語の基本構造」、「『アエネイス』第２巻におけるアエネアスの＜英雄らしさ＞について」「recusatio の味方としてのマエケーナース ── Hor.C.2.12 （上・中・下）」等、一連の論文を発表している。永田さんが研究生活で多くの時間と精力をさかれたのは多分翻訳業で、ご専門の難しいギリシャ・ラテン文献の翻訳に精を出され、単独でストーンの分厚い『ソクラテス裁判』の翻訳書を、共訳でバッハオーフェンの『母権論』等を出版している。このように彼は数多くの業績をあげ、この分野では貴重な研究者として学界でも注目されるところとなっていた。特に近年は幾つかの出版社から翻訳を依頼され、キケローについての大きな翻訳を仕上げられ、その原稿を出版社に送ったところであった。『キケロー選集』の第10巻、哲学的対話篇『善と悪の究極について』（第１・２編）の翻訳で、12年３月に岩波書店から刊行されている。翻訳には多くの精力が求められ、ご家族の話では、特に前年夏頃から11年３月頃にかけてはほとんど休日をとらず、文字通り寝食を忘れて翻訳作業に没頭し、連日深夜12時前後まで大学の研究室で仕事に従事する状態であり、そのような精勤ぶりが寿命を縮めたと想像されるのである。永田氏の翻訳ぶりは文章に推敲を重ね、非常に丁寧で精巧であることが特徴で、消耗するような作業であったことが想定されるのである。加えて、博士論文執筆の計画もあり、この翻訳が彼の研究テーマと博士論文に密接な関わりをもっていたので、特にエネルギーを集中し熱心な取り組み方をしたと考えられるのである。学会活動も日本西洋古典学会が中心であったが、英語を教えている関係から、大塚英文学会等にも属していた。

永田助教授の教育組織における活動について言えば、故人はきわめて教育熱心であり、日本語・日本文化学類では講義および演習「世界文学と日本文学」や英語上級「専門英語」等を担当し、外国語センターで共通科目の英語を、比較文化学類でもう一つ講義をもつなど、平成10年度は７コマの講義あるいは演習、そして授業を担当していた。この他に同学類は教官が少なかったので、クラス担任や学生担当、入試関係の諸委員等多くの委員を兼務していたし、また、毎年数名の学生に卒業論文指導を行っていたのである。これらの仕事に彼は情熱を傾けて誠心誠意あたってこられた。几帳面な性格なので、学生の指導は親切で、電話や電子メールなどを利用するなどして、深夜にまで及ぶことがあったという。教育部門では本来の専門とは異なる英語担当が多いので、もし

かしたらその面ではやりにくかったかもしれない。大学としては彼の専門と貴重な知識を生かすべく、比較文化学類にも専門の科目を用意したり、そして大学院研究科においても専門にそった授業担当の計画が進められていたのである。

その他、永田助教授は所属の現代語・現代文化学系では予算委員その後紀要図書委員を担われ、特に後者の委員会では副委員長で書記も兼ねて活躍されてこられた。とにかくどんな職務であれ、真摯かつ熱心にあたられるのが彼の身上で、これらの任務も誠実にこなされ、良き評判をとり、掛け替えのない存在であった。ただ本学系の中では英語担当や文学担当の同僚たちが多数いたとはいえ、その中で日本語・日本文化学類はおひとりであったので、その点若干寂しい想いをされていたかもしれない。

永田さんはたいへん地味で控え目、とても暖かく思いやりのある人柄であり、学生からも同僚たちからも非常に慕われ敬愛されていた。仕事ぶりはきわめて真面目で熱心であり、むしろたぶん真面目すぎ、熱心過ぎたのかもしれない。彼の分野の学問は非常に大きな知力と労力を求められるが、マイナーな分野なので努力がなかなか実らず認められないことが多々あると思われるけれども、それでも彼は愚痴ひとつ言わずに、こつこつとやっていると側から見ていた。筆者自身マイナーな領域の学問に携わっているので、そのような永田さんを同情をもって見ていた。

それにしても、享年四十七歳での人生の中断というのは、それがいかなる理由にせよ早すぎよう。長い研鑽で蓄積し築き上げた知識を十分に、いやいくらも生かし得ずにあの世に行ってしまうというのは、何と言っても早すぎ、ほとんど残酷な話である。研究者としてはこれからという時であった。本人はいかばかり無念であったことだろうと思う。奥様と小さいなお子様を残しての黄泉路への旅立ちだったので、よけい心残りだったろうと想像される。本当にもっと生き長らえ、せめてもう少し家族や学生たちのためにも仕事をしてほしかったと思う。

新学期のあのとつぜんの死からはや11か月が過ぎた。でも、いまなお永田さんのいつも変わらない穏やかなお顔がまざまざと思い浮かぶ。返す返すも尊い同僚を亡くしたという想いがして哀惜の念に堪えない。

しかし残念ながら、いまは無念をかみしめてただ心からご冥福をお祈りするばかりである。